桐壺（光源氏の誕生）

訳　坂東　忠義

桐壺（光源氏の誕生）No.2

前の世にも御契りや深かりけん、世になく清らなる玉の男皇子※8さへ生まれたまひぬ。「・・いつしか」と心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧ずるに、めづらかなる児の御容貌※9なり。※10※11※12

一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、「疑ひなき儲けの君」と世にもてかしづき聞こゆれど、この御匂ひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひ※13にて、この君をば私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし。

はじめよりおしなべての上宮仕えしたまふべき際※14にはあらざりき。覚えいとやむごとなく上衆めかしけれど、わりなく纏させたまふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にも故あることの節々※15にはまづ参上らせたまふ、ある時には、大殿籠り過ぐすして、やがて侍※16はせたまひなど、強ちに御前さらずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽き方にも見えしを、この皇子生まれたまひて後は、いと心殊に思ほしおきてたれば、「坊にも、※17ようせずは、この皇子の居たまふべきなめり」と一の皇子の女御は思し疑へり。人よりさきに参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、皇女たちなどもおはしませば、この御方の御諫めをのみぞなほ煩わしう、心苦しう思ひ聞こえさせたまひける。畏き御蔭をば頼み聞こえながら、貶め疵を求めたまふ※18人は多く、わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。

帝さまとこの更衣とはよほど前世からの因縁が深かったのでしょうか。この世にまたとないほど清らかな、白玉のような男の皇子さままでお産まれになりました。帝さまは、「赤ちゃんに会えるのはまだか、まだか。」と、じれったがりなさって、急いでこの更衣と赤ちゃんを宮中に参上させてご覧なさいますと、見たことがないほどかわいらしい赤ちゃんのお顔やお姿です。

第一皇子さまは、右大臣家の女御さまがお産みになったお子さまで、後ろ盾の権力が強くて、「間違いなしの皇太子」と貴族たちも大切にお扱い申しあげていますが、この第二皇子さまの光輝くような魅力にはとても及びもつきません。帝さまは表向きでは第一皇子さまを一応大切になさるお気持ちで接していらっしゃいますが、この第二皇子さまのほうはご自分の〝秘蔵っ子〟とお思いになられて、大切にお育てなさることこの上もありません。

この更衣は入内なさったころは、帝さまの身の回りのお世話をなさる女官のような身分ではなかったのです。もともとは貴族たちからとても尊敬され、高貴な身分らしい風格も備えていらっしゃったのですが、帝さまがこの更衣を、むやみにご自分の側におきなさって、すばらしい管弦楽の演奏があるときや、第一級の催しがあるときには、真っ先にこの更衣を参上させなさいました。ある時には、帝さまが寝過ごしなさって、そのまま翌日もこの更衣をお側に留め置きなさるという具合に、度を超してこの更衣をご自分のお側からお放しにならないようになさっているうちに、周囲の貴族たちの目には、自然とこの更衣が身分の低い女官のような身分にみえていたのです。ところが、帝さまは、さすがにこの皇子さまがお産まれになってからは、更衣に対する扱い方を、格別に配慮なさいました。そのため、第一皇子の女御さまは「皇太子は、もしかするとこの第二皇子さまがおなりになるのではないだろうか。」と疑っていらっしゃいます。この女御さまは他の方々より先に入内なさって、帝さまは女御さまを大事なお方と思いなさって、大切にお扱いなさるお気持ちは一通りではなく、さらに皇女さま方も産まれていらっしゃいましたので、帝さまはこのお方のご意見だけは無視なさることができなさらず、さすがにけむたく、わずらわしく思っていらっしゃいました。

更衣は身に余る帝さまからのご寵愛を信頼申しあげながらも、一方では自分のことを見下したり、あら捜しをなさる方は多く、わが身は病弱で頼りない有様で、帝さまからご寵愛を受けたためにかえって気苦労の絶える間もないのでした。